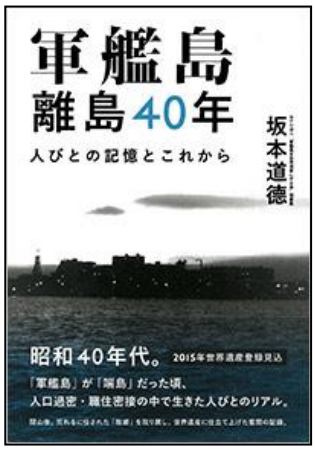
月刊 あなたにこの本を！ 平成 27 年 1 月号

大阪市立図書館 「あなたにこの本を！」選定委員会

大阪市立図書館が購入した新しい本の中から、図書館員のおすすめの本を紹介します。

・・・字が大きめ　・・・中高生にも　・・・図・写真が多い

※価格のあとの（ ）内の番号は、大阪市立図書館書誌 ID です。



軍艦島離島 40 年
ー人びとの記憶とこれからー

坂本道徳　著
実業之日本社　1800 円　(0012996865)

ジャンル ： 歴史・文化に親しむ

自身が企画した同窓会をきっかけに、故郷である端島が軍艦島と呼ばれ、廃墟となっていることを知った著者は、軍艦島を保存したいと考えた。かつてこの島は三菱所有の炭鉱で、学校・アパート・病院など国内最古の鉄筋コンクリートの建造物が密集していた。仲間と共に軍艦島の過去を語り継ぐうち、世界遺産にする構想にたどり着く。閉山するまでの複雑な想いや、世界遺産候補に登録されるまでの苦難の道のりを元島民の生の声から聞き取り、まとめた記録集。〔219.3〕

ロボットは東大に入れるか

新井紀子　著
１００％ＯＲＡＮＧＥ　装画・挿画
イースト・プレス
1400 円　(0013101281)

ジャンル ： 知識・教養を深める

著者は、人工知能「東ロボくん」を開発し、2013 年の全国センター模試に挑んだ「ロボットは東大に入れるか」プロジェクトの一員だ。本書は、その結果や豊富な事例を交えて、人工知能の現状をわかりやすく解説する。例えば、アメリカの株取引ではその 7 割が人工知能で行われ、大学の小論文の採点にも人工知能が使われているという。「10 年後にどの仕事が人間に残るのかが知りたくてこの研究を始めた」著者と共に、人と仕事の未来について考えたい。〔549.81〕

被災鉄道　ー復興への道ー

芦原　伸　著
講談社　2300 円　(0013026869)

ジャンル ： 現代社会を見つめる

東日本大震災発生時、現地の沿岸地域には 31 本の列車が走っていたが、乗客や乗務員に死傷者はなかった。著者は、なぜ被害がなかったのか疑問に思い、何が起こったのかを全路線を歩き取材した。本書は、列車無線が通じず、情報がない状況下での乗務員の懸命な努力を詳細に描く。また、鉄道復興の経過をたどり、復興後の鉄道に乗車した著者は、鉄道は街づくりの中軸となっていたことに気づく。災害からの鉄道の復旧に焦点を絞った、異色のルポルタージュだ。〔686〕

1秒って誰が決めるの?
ー日時計から光格子時計までー

安田正美　著
筑摩書房　780 円
(0013000877)

ジャンル　：　知識・教養を深める

正確さを求めて時間計測は進歩を続け、1 秒の定義も時代と共に変化してきた。現在の定義はセシウム原子時計によるが、さらに高精度な時計の開発が進められている。著者が研究するイッテルビウム光格子時計もその一つだ。本書では時計の歴史を振り返り、時間計測の最先端技術について紹介する。時計の精度を極めることで、地震予知や地下資源探索など、様々な分野の研究が進むという。高度な物理学の理論が私たちの生活と密接に関係していると再認識できる。〔449.1〕

子育ての哲学
ー主体的に生きる力を育むー

山竹伸二　著
筑摩書房　820 円
(0013090103)

ジャンル　：　子どもの成長のために

現代社会では子育ての方法は多様化しており、育児不安を抱える親が多い。「よい子育て」とは子どもが自由を感じて主体的に生きられるようにすることだと、著者は言う。自らの子育てを振り返りながら、子どもの成長過程を現象学の観点から考察し、子育ての本質に迫る。子どもが不安を感じているときギュッと抱きしめ一緒に不安を共有するような、「子どもの身になって感じること」が不可欠だと著者は説明する。子育てがどうあるべきかを考え直せる育児書だ。〔599〕

ものの言いかた西東

小林　隆、澤村美幸　共著
岩波書店　780 円
(0013129858)

ジャンル　：　知識・教養を深める

おしゃべりな人、単刀直入に話す人、それぞれの個性と思われがちな「ものの言いかた」には、実は地域的な違いがあると著者は言う。本書ではその地域差の背景や発達過程を、膨大な聞き取り調査を元に明らかにしていく。朝、知り合いの家にいきなり「オキタカー」と訪問する東北人と、「オハヨー」から始まる定式挨拶を大事にする大阪人とではその違いは歴然だ。「ものの言いかた」という新たな視点で、方言論に一石を投じる一冊だ。〔818〕

日本ミステリー小説史
ー黒岩涙香から松本清張へー

堀　啓子　著
中央公論新社　880 円
(0013231463)

ジャンル　：　知識・教養を深める

欧米で生まれたミステリーが、明治から昭和の日本で定着していくまでの歴史をつづる。幕末、謎解きを含んだ大岡裁きの小説を好んだ日本人にはミステリーを受容する素地があったことや、日本初の創作ミステリーが論理的過ぎるとして不評だったこと等を紹介する。また、刑事を指す「デカ」の由来等、コラムも充実している。近代文学が専門の著者らしく、明治期の翻訳ミステリー事情に多くのページが割かれており、明治文壇史としても楽しく読むことができる。〔910.26〕